


# ふたなり 花粉症

ストーリー付き [28ページ]

ふたなり差分  
(一人ふたなり、二人ふたなり)  
それぞれ11枚ずつの差分

他差分  
・精液ポテ(3段階) ・表情差分 ・等々





成澤 双葉 (なりさわ ふたば)

花粉に反応してフタナリ化する少女。  
いつも親友の春美をティッシュ代わりに使っている。

七瀬 春美 (ななせ はるみ)

ギャルでヤリマン、サセ子などの噂の飛び交う少女。  
双葉の性処理に付き合ううちに母乳体質になってしまった。  
今回も双葉の生オナホになってしまうのか？

んな…っ!?

なんで春美に  
おうちんが!?

!?

今日は私のターンだぜ!

…っていうかキンタマ  
テっつるか!!

詳しいことは小説に  
まかせろぜー!?

ど  
て  
ん!



「ふたなり花粉症」それは名前の通り発症すると「ふたなり化」する花粉症。  
花粉とは植物の精子のようなもの。発症すれば花粉<sup>精子</sup>を飛ばし、子孫を残そうとする  
生殖本能に取り憑かれてしまう。



双葉のふたなり雄しべも  
ギンギンだな！

けど今回お前が使うのは  
雌しべのほうだぜー！

!?

ちよっと…！  
まさかこんな凶器  
入れる気!?

私だって普段からお前の凶器で子宮突かれてるんだ！  
私の立場を知ってもらういい機会だぜ！

ん！



双葉の目の前、自分の雄しべと重なるように存在する親友の雄しべ。  
親友のそれを眺めていると腹の奥で熱く疼く「何か」を双葉は覚える。  
ふたなりの双葉だが元々は女だ。雌としての本能がある。



腕よりも太い肉竿、高く張ったエラ、大きく反り返ったソレは、  
まさに「凶器」と言い得て妙だ。

雌を孕ませることに特化した形をしたソレに、  
双葉の本能が応えるのは、もはや自然の理だ。



どうだ双葉！ 子宮をちんぽで  
突かれる感覚は…！！  
そのアへ顔ダブルピースが  
答えだなあ！



少女たちの雄しべと雌しべが密着する。  
あまりに大きな肉棒に双葉の子宮は持ち上がり、体表に子宮を浮かばせる。



同時に始まる断続的なピストン。

双葉を犯す春美にとってそれは、子宮という苗床を耕すようであり、  
遺伝子という種を植え付けるのに必要なことである。

春美に犯されている双葉にとっては、これから孕まされ事実をわからされている  
いるようであり、一突きごとに雌として産まれた運命を受け入れさせられている。

らめ…春美 堕ち…堕ちる…っ

と…友達なのに…春美の赤ひゃん…  
欲しくなっちゃおう！

まろ…がくせーのの…  
春美の赤ひゃん…

産みたくなっひゃんおまー！



わかったか 双葉!

私は今までずっとその感情を抑えてきたんだぜー!!

生殖本能を抑えるのって  
すげー大変なんだよ!

わ…わがっつ…っ…  
わがっただがっつ…っ…  
っ…っ…  
ちめへっ…!!

もうわからなかったかっつ…!!

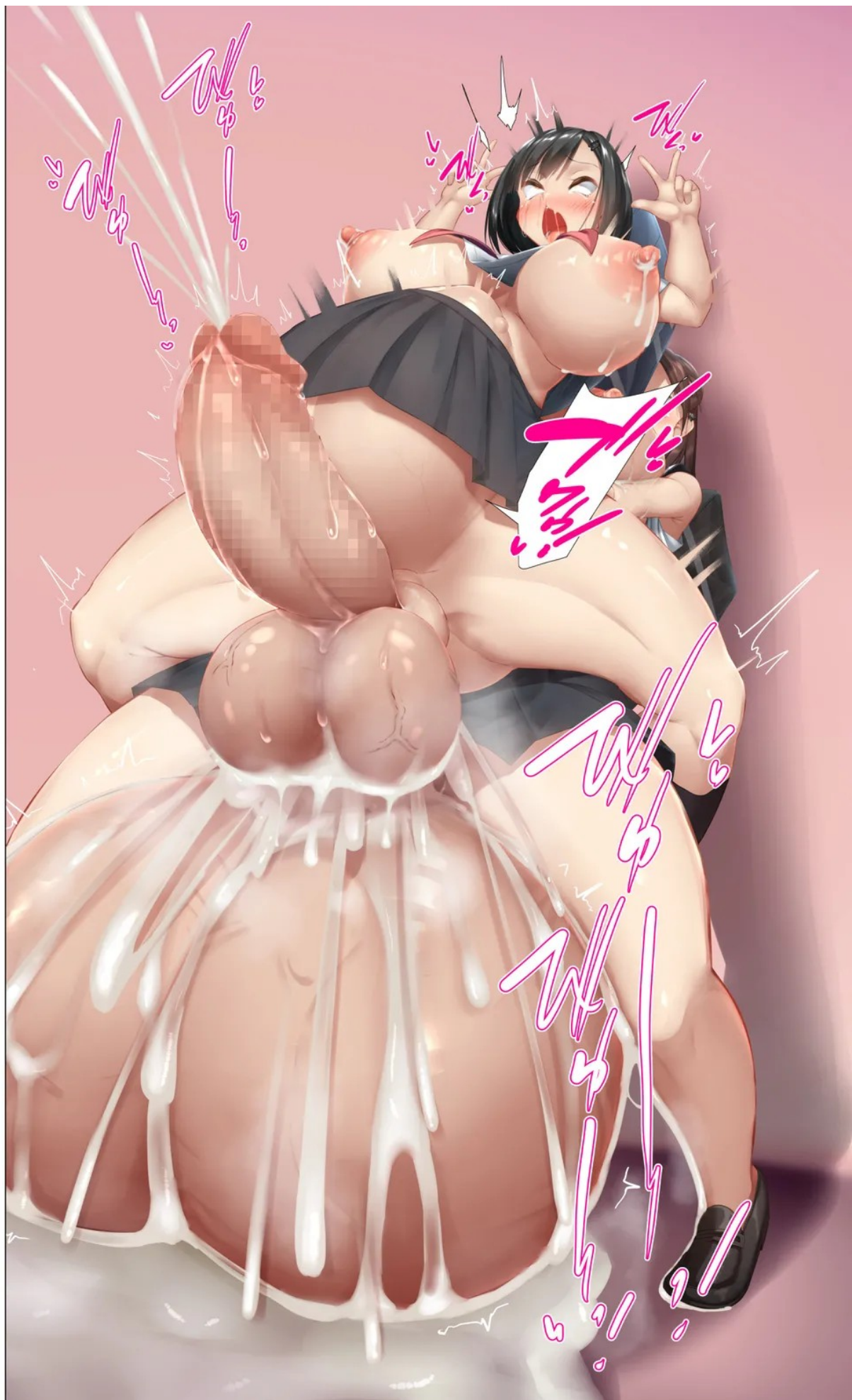








始まる受粉作業。スライムのような粘度の精液が、春美の遺伝子がタップリと詰まった半液体が、双葉の雌しべに撃ちこまれる。その圧倒的な情報量に双葉の子宮はあっという間に満たされキャパシティを超える。それでもなお注がれ続ける精液に、双葉の子宮は水風船のように膨らんでいく。





またたく間に...  
す...す...  
またたく間に...  
す...す...

これがX...!  
Xの感覚...  
これがX...!

す...す...  
す...す...

す...す...  
す...す...



あまりに完璧な種付けに双葉の本能が春美に墮ちる。  
中出し、それはオスがメスに対して文字通り雌雄を決す行為。

春美の遺伝子マーキングによって双葉は本能で理解する。  
自分は子を宿し産むの役目なのだ。

その証に、双葉の乳首からは妊娠前にもかかわらず母乳が滲み出る。  
双葉の身体は母体としての準備をすでに始めていた。



私も気持ちいいぜーッ!  
これがオスの悦びなんだな!

子宮でゴキウ飲み  
とまんねええ!!

安心しろ! いくらでも射精してる!  
飲み放題だぜーッ!

初めて中出しする感覚に春美も浸っていた。  
己の遺伝子をメスに刻み込むという、生物としての根源的な満足感を覚える。  
女だが男としての悦びを噛みしめていた。







悦びを噛みしめているのは双葉もだ。  
そして、初めて中出しを体験するのも双葉も同じ。

春美の精液が子宮内壁に触れた瞬間に双葉は察していた。  
自分はこの精子が好きだと。それは子宮が恋する瞬間だった。

初恋を知った双葉の子宮は、許容量の限界を超えつつも  
今も愛しい精液を健気に抱え込んでいる。



とまった？  
何言ってるんだ…まだまだだぜー！

ふん？

ハイ

ハイ

ハイ







自分は甘かったと双葉は思い知らされた。

もう、好きとか恋とか人間らしいものは不要なのだ。

脳から思考能力を奪った子宮から湧き上がるのは、純粋な生殖本能。  
孕むか、孕まないか、ただそれだけである。





ハイ ハイ

ハイ  
ハイ

ハイ  
ハイ

ハイ  
ハイ

ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ

ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ  
ハイ



ハイ ハイ

おほ

おほおほ

おほおほおほおほ

おほおほおほおほ

ふう…スッキリしたーっ!  
これが賢者タイムか、  
双葉あ 犯される側の感覚わかったか?



ハイ ハイ

わがわが...  
わらわ...は...  
お嬢さん...  
なり...

ちよっと理解力ありすぎだろー！  
私がかかって欲しいのは  
その手前だつての！

わがわが

わがわが

わがわが



んな…っ!?

なんで春美に  
おうちんが!?

!?

今日は私のターンだぜ!

…っというかキンタマ  
デっっか!!

詳しいことは小説に  
まかせませー!!

ど  
て  
ん!



「ふたなり花粉症」それは名前の通り発症すると「ふたなり化」する花粉症。  
花粉とは植物の精子のようなもの。発症すれば花粉<sup>精子</sup>を飛ばし、子孫を残そうとする  
生殖本能に取り憑かれてしまう。



そういう双葉のふたなり雌しべも  
パツリ開いてるぜー！

私の雄しべを啜えたがってる  
証拠だなーっ！

!?

ちよっと……！  
まさかこんな凶器  
入れる気!?

私だって普段からお前の凶器で子宮突かれてるんだ！  
私の立場を知ってもらういい機会だぜ！

ん！



双葉の目前にそり立つ親友の雄しべ。

その肉の雄花から漂うオスのフェロモンが鼻孔をくすぐり、呼応して双葉の花弁もパツクリと開き肉の雌花が硬く勃起する。



腕よりも太い肉竿、高く張ったエラ、大きく反り返ったソレは、まさに「凶器」と言い得て妙だ。

雌を孕ませることに特化した形をしたソレに、双葉の本能が応えるのは、もはや自然の理だ。

現に双葉の女性器から滴る愛液は、花が分泌する蜜のようなものだ。なぜなら、そのメスの匂いで春美というオスを誘惑し、虫を利用し受粉を測る花のようなものだからだ。



どうだ双葉！ 子宮をちんぽで  
突かれる感覚は…！！  
そのアへ顔ダブルピースが  
答えだなあ！



少女たちの雄しべと雌しべが密着する。  
あまりに大きな肉棒に双葉の子宮は持ち上がり、体表に子宮を浮かばせる。



同時に始まる断続的なピストン。一方的で破壊的な光景だが、  
春美の肉竿を深々と咥え込みつつも、双葉は生殖器は潮をまき散らし  
喜びの感情を表現している。

双葉を犯す春美にとってそれは、子宮という苗床を耕すようであり、  
遺伝子という種を植え付けるのに必要なことである。

春美に犯されている双葉にとっては、これから孕まされ事実をわからされて  
いるようであり、一突きごとに雌として産まれた運命を受け入れさせられている。

らめ…春美 堕ち…堕ちる…っ

と…友達なのに…春美の赤ひゃん…  
欲しくなっちゃおう！

まろ…がくせーのの…  
春美の赤ひゃん…  
産みたくなっひゃんおまー！



わかったか 双葉!

私は今までずっとその感情を  
抑えてきたんだぜー!!

生殖本能を抑えるのって  
すげー大変なんだよ!

わ……わがっ……  
わがっ……わがっ……  
わがっ……わがっ……  
わがっ……わがっ……

もうわからせれたかっ……







原女



始まる受粉作業。スライムのような粘度の精液が、春美の遺伝子がタップリと詰まった半液体が、双葉の雌しべに撃ちこまれる。その圧倒的な情報量に双葉の子宮はあっという間に満たされキャパシティを超える。それでもなお注がれ続ける精液に、双葉の子宮は水風船のように膨らんでいく。





す...す...す...!!  
またたく間に抗えぬ!!

す...す...す...!!  
これがXス...

これがXス...!!  
Xスの感覚...!!

Xス!!  
Xス!!

Xス!!  
Xス!!



あまりに完璧な種付けに双葉の本能が春美に墮ちる。  
中出し、それはオスがメスに対して文字通り雌雄を決す行為。

春美の遺伝子マーキングによって双葉は本能で理解する。  
自分は子を宿し産むの役目なのだ。

その証に、双葉の乳首からは妊娠前にもかかわらず母乳が滲み出る。  
双葉の身体は母体としての準備をすでに始めていた。



初めて中出しする感覚に春美も浸っていた。  
己の遺伝子をメスに刻み込むという、生物としての根源的な満足感を覚える。  
女だが男としての悦びを噛みしめていた。







悦びを噛みしめているのは双葉もだ。  
そして、初めて中出しを体験するのも双葉も同じ。

春美の精液が子宮内壁に触れた瞬間に双葉は察していた。  
自分はこの精子が好きだと。それは子宮が恋する瞬間だった。

初恋を知った双葉の子宮は、許容量の限界を超えつつも  
今も愛しい精液を健気に抱え込んでいる。



とまった？  
何言っただ…まだまだだぜー！

ふん？

ハイ

フン

フン





孕!!  
を!!  
い!!

超  
孕!!  
を!!

双葉あ!

お前まさか孕むのが  
一人だけだと思っなよ!

!!

!!

!!

!!

!!



自分は甘かったと双葉は思い知らされた。

もう、好きとか恋とか人間らしいものは不要なのだ。

脳から思考能力を奪った子宮から湧き上がるのは、純粋な生殖本能。孕むか、孕まないか、ただそれだけである。







ハイ ハイ

おほ

フワッ  
フワッ

フワッ  
フワッ  
フワッ

フワッ  
フワッ  
フワッ

ふう…スッキリしたーっ!  
これが賢者タイムか、  
双葉あ 犯される側の感覚わかったか?



わがわが...  
わらわら...  
お嬢さん...  
はなみ...  
なり...

ちよっと理解力ありすぎだろー！  
私がかかって欲しいのは  
その手前だつての！

ハイ ハイ

わがわが...  
わがわが...

わがわが...  
わがわが...

わがわが...  
わがわが...



うへへへ  
しゅわんがはりのこと  
旦那さんだと思へるのよ

オイオイ私だって女だぜー？  
まあもしものときは双葉のために  
旦那さんになってやるよ！

ハイ ハイ

しゅわん  
しゅわん

しゅわん  
しゅわん  
しゅわん

しゅわん  
しゅわん  
しゅわん

しゅわん  
しゅわん  
しゅわん  
しゅわん











































